鮮滿漫筆　一話一詠（下）

葛原しげる

○

かういふ事は、内地にだつて、よく有ります、方々でよく見ます。

綱もなく飼ふ人もなき牛の子の汽車
見て立てり草喰むを止めて

こいふ光景は、大して珍らしくはないのです。しかし、事滿洲こなるこ、それが格段の事に見え、珍しこ見えるのです。こいふのは、牛の子ばかりでなく、人間も、汽車が珍らしいさうで、乘るのでもなく、出迎へるのでもなく、子供でもないのに、只、汽車の見物に、停車場の柵につかまつて、並んで見てゐるものも多いのですから、牛の子も、汽車が珍らしいのでせう。きよこんこ立つたまゝ、葉を食べるのを止めて、見て立ちつくしてゐる虚心の樣、放心の樣が、目につくのでした。

○

牛は立ち馬は寢ねたるまゝにして動
かず汽車を見て畑にあり

牛も馬も、畑を耕すこて、人こ共に働いてゐたのですが、お午時こ見えて、人は、人こ相寄り晝餐するらしく、牛は馬こ相寄りしこいひ得れば面白いのですが、やはり、滿洲でも、牛は牛連れ、馬は馬連れなのでせうね、牛こ馬こは別々になつて、そして、皆、等しく、汽車を見てゐるのでした。

こころが、ある所では、汽車を怪物こでも見たのでせうか、

「やァ、怖いよう」

こも何こも叫ばず、只、急に、列ね出して、獨りで、逃げて行くのがありました。しかし、少しばかり逃げた頃には、汽車は、既に、そのあたりを通過してしまひますから、やがて、親牛の近くへ戻つて來るのでせう。親牛も

「これ〳〵大丈夫だよ。そんなに逃げないでも、大丈夫だよ。怖くはないんだよ。汽車さんは、お行儀が善いから、おきまりのレール道の他は、お歩きなさらないんだよ。だから、大丈夫だよ」。

とも、何とも呼びかけないで、「逃げるものは追はずに」でもなく、自信ありげに、だまつて、やはり、草を食べつゞけてゐるのです。

汽車來れば、土手に草喰む子供牛親を
はなれて獨り逃げ行く

五の句は「逃げて行く」と字餘りにした方がのんびりして、少し間抜けて、かなり頓馬で、ふさはしいとも思ひ、「て」を入れて、間伸びさせた方がふさはしいとも惑ひ、實は今にきめかねてゐます。

○

けれども、又、かういふのもありました。

驚きて畑を逃げゆく親と子の驢馬も
おもしろ北滿の汽車

これは、驢馬です、おとなしい事が特性の驢馬です、ですから、子供だけでなく、親も一緒に、トコトコ、トコトットとばかり、逃げて行くのでした。きつと、長耳をふりふり逃げて行くのでしたらうが、汽車の窗からは、耳までは見えなくて、

「やァ、逃げる、逃げる、驢馬がホラ、ね……」

と、幼な兒連れだつたら、悅んで、人間の親子して、見て行く事でしたらう。

○

柵近う大人もまじり嬉しげに珍らしげ
に汽車見る北滿洲

前述の光景です。これも、第五句を　見るを見て行く　としたのですが、それは

「ほら〳〵ね、あんなに、多勢出て、汽車の見物をしてゐますよ」

と、幼な兒に、その人達を汽車の中から見せて乘つて行くのであつたでせうけれど、さう結んでは、何地の汽車路か分らなくなるので、「滿洲」といふ語を入れたくて、「見るよ滿洲」ともして見ましたが、それでは、奉天も、大連も、滿洲なのですから、そして、その地方には、そんな光景はありませんから、明かに「北滿洲」と斷はつたのです。

○

しかし、ごうも、やはり、散文めきますので、それよりも、もつと、北滿らしいところを見つけました。

一日に一度の汽車をよろこびて畑よぎり
來る北滿の子等

ごうしても、子供が出なくては、生きて來ませんですね。ハイ。

これも、上句を

一日に一度の汽車が來た來たと

としてゐたのですが、この第三句の口語法になつてしまふ事が、少し、氣になつて、抽象的に「よろこびて」としてしまひました。けれども、今、兩方を、よみなほし、よみくらべて見ますと、よし口語になつてしまつても「來た來たと」といふ實感の方が、「よろこびて」と批評めいた表現より、遙かに優つてゐると考へられて、困つてゐます。何れにしても、畑を、植ゑ物なぞ、蹶ちらし蹶とばして、驅けて來るのです。汽車に向つて突擊するやうに、わーい！〳〵とばかり——その聲は聞えませんけれども。

熱河省の或る山間では、たしかに、大人が、幼兒を抱上げて、汽車を見せ見せ、驅け出すのがありました。

「汽車ちうものはー」

と、感心してゐるのでせう。そして、私は「汽車開道」といふ題でしたか、吉丸一昌先生の名歌と、同じ題の內田嘉吉氏の學校劇とを思出して、長旅の汽車路を獨り、樂しんでをりました。

○

さまれ、長い汽車の旅路です。

「今日は、退窟なさるでせう」

と、出立の朝、見送の人々にいはれました。

「晝寢でもなさるんですね、昨夜、おそかつたから——」

とも、いはれました。

けれども實は、滿洲に關する書物も、雜誌も、よみかけては、よみつゞけかねてあるのです。といふのは、何地方も、初めてのエトランゼとして、私は、窗の眺が珍らしくて、本の上に眼を落してばかり居れないのでした。そして、時に、廣い車室の中で、まるで自分の書齋の樣に、トランクも半開きのまゝにして、前のベンチに置いて、座席には、什具も取り散らして、終るを、只一人、暮らした事が幾日もあります。さういふ長旅と見ると車掌が、ボーイをして、

「机をお出しいたしませうか」

と謂はせます。机とは、汽車の中だけで使用する折り疊式のテーブルで、極めて簡單に、窗枠に卓の一端を持たせて、他の一方に一本だけ、稍〻幅のある脚がついてゐて、小机になるのです。その上で、手紙もかけ、時々サービスして來るお茶碗も乘せ、二三種の本でも雜誌でもを竝べて、讀み合せも出來るのです。といふ次第です。サービスといへば、熱いタオルも、一日に數回、しぼり替へては、持つて來てくれますし、番茶も日本の湯呑で、何回も、くばつて來ますといふ譯ですから、「あわてゝも仕樣のない急いでも、着く時が來なければ、着かない、下りられない汽車」ですから、極めて氣長に、氣樂に、のんびりと、乘りつゞける事が出來るのでした。

日暮れずば降りざる汽車の長旅に書よみ
歌よみ寫眞とり行く

此の下句は、全く、歌の句になりませんが、しかし、實際かうなので、他に、何とか謂ひ變へたら、ウソになります。

○

かういふ日には、一等寢臺に寢て空を見るのも一つの仕事です。寢臺といつても、內地の一等のより、遙に廣いのですから、

汽車に寢て空の靑きと浮く雲の白きを
見て行く滿洲の長旅

ともいへます。但し、此の下句では、長旅に、いさゝか、うんざりした樣にひゞきますが、實際はさうではなくて、樂しい長旅なのです。いつまでも、かうして、のんびり續けたい汽車の旅なのです。

○

北滿の汽車に寢ながら白雲を仰ぎて
遠く思ふ鄕さと

敢て旅愁とは申しません。寢て仰ぐ空の懷しさは、私には、少年時代の故鄕の夏の夜空でした。暮れて間もない涼み臺に、空を仰いで星を數へ、次々に出て來る星と星とを繫いで、いろ〳〵の形の三角形や、四角形を想像して樂しかつた故鄕でした。今は、晝、星でなくて、雲を見るのでした。

滿洲の雲、それこそ、滿洲の景色です。畏い事ですが、三笠宮殿下の士官學校御同期生が、北滿旅行の時、

「滿洲の野は、單調だといふ。なるほど、野をのみ見れ

ば、變化はないが、野と共に、空が必ず目に入る、空の雲が必ず目に入る。その雲こそは、滿洲の景色だ」

と、「若き士官候補生が、いひましたよ」と、牡丹江から乘合せたY中將の談片でした。全く、滿洲は廣いから、野の果から果に浮ぶ雲が、みな、一眸に收まつて、色なり、形なり樣々なのが、見えるのです。

いたづらに廣きをのみの野に浮ぶ
雲の色見よ其の形見よ

といふ上の句では、その意味が不鮮明で困りますが、ずばぬけて、途方もない廣さなので、やたらに目に入る雲なのです。「滿洲の曠野の景色は、雲にある」と、若い士官を驚かしたといふことを私は、長い滿洲の旅の間中、何度もく〳〵思ひ出して、「ほんとだ、全くだ」と感心した事です。

最近、南中米の諸國を、飛行機で、高飛して歸つて來た友人M貴族院議員が、君にいふのです。

「君の如きは、地上や海上の事だけを童謠にしてゐないで、一つ、空中文學として、雲間飛行中の雲の美しさ、その壯大美、また絶好の色彩美を、歌はなきやいかんよ」

と。けだし、ラスキンならずとも、雲の美は、月と、星と共に、幼兒の心を動かすに十分でありませう。

○

曠野、とてつもない曠野、その地平線の珍らしさには、野の果の果の畑を耕してゐる馬と人とが、まるで、宙に浮いて見えるのです。よく〳〵見ると、細い〳〵脚も見えてゐるのです。その脚の間に、又その腹の下に、遠く湧いてゐる雲が、見えるのです。愉快きはまる地平線です。

「やァ、面白いなァ」

と、幼兒ならずとも、叫びたいところです。獨り旅の悲しさには、

地平線に浮きてぞ見ゆる馬も人も
脚さへ見ゆる畑耕すが

と、ノートにメモするだけで、惜しくて堪りませんでした。これは、啄木より早く、前田翠溪(純孝)が、やつてゐたやうに、

地平線に　浮きてぞ見ゆる
馬も人も　脚さへ　見ゆる
畑耕すが

と、上句、下句の分別書でなく、そこで書き分けた方が、

よく分つて頂けませうか知ら。

○

野の果の果は海かや　空に浮く雲一つなき

北満大野

一つの歌の中に、「野」の字も二つ、「果」の字も二つ、こんなまづい表現は禁物ですけれども、さう謂はないでは濟まされない程の野であり、その果の感じなのです。

○

見はるかす大野の末の立木みな浮きて見

ゆ見よ北満の夏

これは「見」の字三つ、いよ〳〵もつての外ですが、

「あれ、ごらんよ、あんなに見える……」

ですから、敢て、「見ゆ見よ」です。それよりも、第五句は夏に限らないのでせうが、光線の屈折で、遠野の末さ、眼の位置さの空氣の密度の差によつて、浮上つて見える面白さで、幼兒ならぬ私は、何度か、地圖を出して見ては、海でも、川でも無い所だのに、(水に浮んでゐるやうに見えるのに、)幾度も、驚かされました。中には、野末に見える少しの隆起が、明らかに島さ見えたのでした。

「妙ですねえ、やつぱり、水たまりでも出來てゐて、その向側の丘でせうか」

「きつさ、昨夜あたり、大雨でも降つたんでせうねえ」

「何うも、さうらしいですねえ」

「流石に滿洲ですねえ」

「全く――」

なぎゝ、極めて、おめでたい事でありました。ハイ。

○

家いづこ村はいづこぞ、大野原を小さく

小さく見えて人行く

人が行くからは家があるのです、人が行くからは村があるのです。しかも、遠い〳〵野の果に見える人かげです。

「まア、あれ、人間――まア、あれが……」

さ目を圓くして、幼兒さ共に驚いたでもありませうをちの方。

「あの向かふに、移民部落があるのです」

ときいて、

「ずゐ分、不自由な事でせうねえ」

さ、その生活を想像して見るのでした。開拓者さしての使命には、冒險が伴つてゐます。その危險から、部落を守る爲にも、一筋二筋の電信線を架け渡して、レールには斜に、遠く〳〵連なつて、地平線の彼方へ消えて行く電柱の一列

が、尊さいものに見えました。

地平線の果に消え行く電柱の一つ一つに
生命あり皆

電柱の一本は倒されても、前と後の電柱が、心を合して、電線を力綱ともして、助けて呉れませう。しかし、電線一筋斷られたら、移民部落は闇ともなりませう、實に、電線二筋は、夜毎、光明を傳へ、日毎、光明による安堵、歡喜、さては希望を送る命綱、全く、尊さい一筋でありました。それも、續き續く電柱のあればこそと思つて見ますと、內地で見るのとは全く似もつかぬ細いのもありますが、電線は一筋か、山々二筋なのですから、太い電柱の必要もなくてすむ移民村でありました。

細けれど移民部落へよろこびと光を
送る電柱の列

○

さる驛では、移民部落民の一半を分家して、次の驛から二三キロ奥地さして、新開拓に勇躍して行く人々を見ました、乘合はした或る部隊長は、ホームに下りて、激勵の辭を述べてをられました。移民達の中には、かなりの年輩の人々も交つてをり、眼鏡に有髯の人もゐました。

鍬を手にスコップ肩に一群の大男
行く野を拓きに行く

といふ程、大男揃ひでもなかつたのですが……

○

少し悲しいこともあります。しかし、それは、皮相の悲しみで、本當は、嬉しい事なのです。

破壞と建設です。戰爭と平和です。建設の爲の破壞であり、平和の爲の戰爭です。

滿洲の所々に、破壞の跡を見ます。破壞された家の跡を見ます。曾ては、馬賊匪賊に破壞された家々が多かつたのです。それは破壞の爲の破壞です。ところが、最近、所々に見る破壞は、建設の爲の破壞です。匪賊が來て、根據地にしては困るからとて、先に破壞してしまふのです。壞された人達は、安全地帶に、一かたまりに、立派に新築された家を貰ふのださうですから、一面、嬉しい破壞とも申しませう。しかし、家庭には土地が付き物ではないのでせうか。しかし、只、少くとも、滿洲では、どうも、大體、同じ原つぱですから、特殊の感情乃至愛着が、土地には無いにしても、しかし、たしかに、破壞された家の跡——土壁の立

ち殘つてゐるあたりに立つて汽車を見てゐる子供を見ました。また、豚も、鼻を地面につけて、うろ〳〵してゐるのが見えました。豚にも豚の感情があり、愛着があるのでせうかういふ所で、大人が一人も見えなかつたのが、氣にかゝります。まさか、その破壞は、破壞の爲の破壞だつたので、匪賊に連れて行かれたのではないでせう。きつと、新築せらるべき新集團部落の用事に出かけたのでせう。只何としても、破壞されず、持つて行かれず殘されてゐるものは、大きな挽石でした——挽臼といひたくなる、大きな平たい石が、臼の形に凹んでゐないのです。圓形の大きな平石の中心から、小溝が斜に外緣へ向つて幾筋も掘つてあつて、その上を、獨樂の形に心棒のついてゐる稍〻大きい石が、横に轉ぶ樣にしたものが、破壞された後の、露天に殘されてゐるのでした。もし、內地だつたら、井戸や、井戸のほとりの柿の木が、目につくのでせうに。

壞されし家あり跡をさまよへる豚あり
子供の立てるもありて

このみでは、どうしても、悲しい歌になつてしまつて、それこそ、作者は、悲しく思ひます。歌の表現の力無さに、しかし、實はこの歌は、悲しい歌として、獨自のものたらしめたいのでもあります。

○

北滿洲の汽車の乘客、一等室は、軍部の上官か、滿鐵の高級社員、滿人は極めて稀。そして二等室は、軍部でも、下士官級、若い滿鐵社員、及び、列車を護衛する「警乘」兵。

そんな事は、いづれにしても、私の旅に關はる事ではないのですが、不思議でもありませんけれども、子供の乘合はすくなくが、殆んど無くて、淋しい事でした。それは全く、さもありぬべきところで、滿洲奧地を旅するものは、要件中の要件に、一日一回の汽車に、心して乘込んで急ぐ人ばかり。子供を連れる人は、嬉しい轉任か、悲しい引上かですから、ザラにあつてはたまりません。

かくて、汽車の中は、殊に長い汽車の旅である時は、多く、居眠りか、食堂か、朝出る時の新聞の廣告欄まで讀み耽るか、心なく見る窓の景色か、不鮮明な意識の下にうと〳〵したやうな、ごんよりしたやうな、憂つて、よどんで、かつたるい折、急に、私の耳に響いたのは、

「見よ東海の空あけて」

と、明快な、齒切のよい子供の歌聲。

はつとして、聲のする方を見れば、いつどこから乘り込んだか、私の背後(はいご)、幾つ目かのベンチに、六七歳の幼兒が、窓から外を見ながら、歌ひ出したのです。

「これは、いゝ」

と、私は、悦びました、子供そのものも嬉しい上に、その歌が、「鳩ポッポ」でなく、「靴がなる」でなく、無論、「ニコ〳〵ピン〳〵」である事よりも、「愛國行進曲」であつた事が嬉しいのです。

ところが、いつまでたつても、「見よ東海の空あけて」ばかりでありましたが、やつとの事で、こいひたい位、幾回目かに

「旭日高く輝きて
天地の正氣――」

とつゞいたと思つたら、その正氣は、一大飛躍をして、

『――皆共に、
みいづに　そはん　大使命」

と、はしよつたものです。そして

「四海の人を導きて
金甌無缺搖ぎなき
我が日本の姿なれ」

と逆戻りして、また、

「見よ東海の――」

と振出しへ戻る雙六遊びになつてゐたのですが、しかし、よし、大行進は、來なくても、進まん道は示されなくても、幼兒は、只、あの、メロディに救はれて、汽車の長旅を、長しともかこたず。

「お母さま、まだ下りないの」

とも、せがまず、一人で、聲はり上げて、まことに、朗らかであつたのです。あんな六かしい歌は强ひて、正しく、教へる必要もなく、習ひたくもなく、もし、大人と高唱しなくてはならぬ時は、各節各句の末だけでも、

「――て
――ば
――と」

とでも、節を揃へつゝ、所々、一緒に歌へれば、すむのです。それよりも、所と、時とを思うて、まことに嬉しい愛國行進曲でありました。私の長旅の中、方々で聞いた中で、これが一番、嬉しい愛國行進曲でありました。

汽車内に聞くや愛國行進歌北滿
にして歌ふ幼な兒

○

滿洲の道路、それは上から下まで千差萬別、ともいへませんが、北滿洲の奥地になりますと、驛のすぐ前の廣場でも、厚く、砂利がしいてあるから宜い樣なものゝ、砂利でもなかつたら、小雨で、ぐろんこのぬかるみになつてしまふのです。そして、馬車の轍の跡が固く殘つて人力車たる

洋車でも、馬車でも、又自動車でも、搖れる事夥しいのです。

さる小驛近く、その雨後のぬかるみ路に惱んで、遂に下りて、驛に向つて、自轉車を手押しで押してゐる人を見ま、した。その人は、汽車を見ながら、自轉車のハンドルを持つたまゝ、何だか、心ありげに、突立つてゐました。

「この汽車に、何か用事のあつた人でせうに。ぬかるみの爲に、間に合はなくなつたんでせうね。一日一回の此の汽車に――」

さういつて、見返つた時、その人は、まだ、元氣を新にして押して行くさも見えませんでした。

驛近う野路ぬかるみて押せご押せで
自轉車動かず汽車を見る人

○

朝鮮でもでしたが、滿洲では、楊の木、また、ポプラの木にさへ、烏の巣がありました。まだ、葉の出揃はぬ頃でしたから、すぐ目につく巣でした。

一體、烏の巣といへば、內地では、深山さまでは謂はなくても、人里近くは珍らしいこと、先年、東京の日比谷公園の大木に烏が巣くつた時、わざ〳〵、立看板をして、↑の矢印までつけて、教へたものでした。

滿洲では、全く、人里近く、ごころか、停車場の楊の木にさへ、巣をかけてゐるのでした。ピー〳〵ゴー〳〵喧しく、人の往來の繁い停車場に、しかも、折々の汽車の煤煙を浴びて、平氣で――。まるで、汽車路の徒然を慰めるために、鐵道で、烏に賴んで、巣くはせたかのやうに、內地のものには珍らしい光景でした。

內地からの幼兒が、これを見たら、何んなに悅ぶことでしたらう。煙の消え行く驛の楊の梢近く巣の中には、大きな烏が、首を出してをり、牝の烏が、隣の楊に止つて啼いてゐるのは、何といつてゐるのでせう。たとへば、

「此の汽車には、私の家への客は乘つてゐないよ」

とか何とか――烏も乘れるものと思つて汽車に親しんでゐるかに見えるのでした。

汽車に馴れ煙に人によく馴れて烏
巣くへり驛の柳に

○

烏の巣で、もつと、私を驚かし、また悅ばしたのは、

大滿洲廣きがまゝに木の無きに電柱
にしも烏巣くへり

です。電柱に、横に、上下に並べて打着けてある細い棒と棒との間に、小枝を集めて、巣をしつらへてゐるのには、驚きました。そのあたり、あまり廣くて木立のある山もなく、また、野に立つ木もなくて、やむなく、野に立つ木に相違ない電信柱に、巣くつたのです。しかし、何十何百何千と並ぶ同じ形であり。同じ高さであり、すべて同じ條件の多くの電柱の中で、此の一本を、何うしてこの鳥は選んだのでせうか、

「あんなに巣をかけられて、電信電話の故障を來しませんか」

と、私は車掌に尋ねて見ました。——本當は、さう尋ねないで

「故障を來すから、次の驛で、保線工夫にでも知らせて、早速、あの巣は、取り除かしては何うですか」

と、すゝめたかつたのです。しかし、車掌は、少しも驚かぬばかりでなく、何の氣にも留めない風でしたから、かねて、電柱に、巣のある事はよく知つてゐるんだと、覺つて、さういつて、尋ねて見ました。すると、果して、車掌は、

「毎年、今頃になると、あんなに、巣をかけます」。

と、無雜作にいつてしまひました。そして、電信電話の故障を來すか來たさぬかの返事はしてくれませんでした。けれども、故障のない事は、その返事で察しられましたから、

「珍らしいですね」

といつておきましたら、

「内地には、無い事で御座いませうね」。

と。これは、内地のことは、よく知らない人らしう聞えました。

○

さる部落の小さな驛を、汽車が出た時、たとへば、町の裏通りともいはれる家並少々の裏庭の垣根の外で、明るい日ざしの下の楊の木かげに、白い鷄と、黑い豚の子とが二三羽二三匹、一群になつて、餌をあさるらしく、めい〳〵に動いてゐました。それを羨ましげに見てゐるのが、垣の中の家鴨でした。

「私も出て、自由に、廣々とした自然の庭で遊びたい」

と、きつと、心の中では、謂つてゐたに相違ありません。

鷄も豚の子も出て遊べりと垣よりの
ぞく家鴨の親子

鷄は、朝鮮で、豚が滿洲で、家鴨は支那でこまでは謂ひませんが、鷄と、豚とは、廣々とした自然の庭に放ち飼ひして、家鴨だけは、なぜ、垣の外へ出してやらないのでせう。

○

鷄も遠出してあゝ滿洲の曠野の中
の驛に飼はれて

二羽三羽の鷄は農家のものであり、家庭的に家畜として、家族の一員とも親しみたいのですが、汽車の事務をとる驛で飼つてゐるなどは、凡そ不調和にさへ感ぜられます。

ところが、一日に一回しか客車が通ぜず、貨物列車も、多くはない北滿の驛の、用事少なさから、盆栽を樂しみ、花壇をしつらへ、小鳥を飼ひ、鷄を飼ふのです。

「何といふ樂上滿洲の象徴でせう」

「鷄を盗むものもゐないのでせうぇね——あんなに、一二羽だけ、人家から離れて遠出して、のんきに遊んでゐても——」

「全く、平和のおかけですよ」

今更に、さういつて悅びました。

○

幼な兒の頭は、身長に對して、大人より、大きいのが、特徴です。それと、圓い頰つぺと、可愛い眼と。

朝鮮の子供の中でも、女兒の服裝の可愛さは格別ですが、滿洲の幼兒の着物は、目立ちません。しかし、幼兒は、何處でも、可愛い頰つぺ、可愛い眼。その二つが、しきりに、東京の。いきくした幼兒を思はせて、滿洲語がつかへれば、何とか、可愛いゝ子等と話して見たくて堪らなかつた私です。

圓き頰に、つぶらなる眼に幼な兒が
都の子等をしのばす滿洲

どこへ行つても、どこに居ても、子供が目につく事です。そして、東京で親しんでゐる幼兒の誰彼が、目前に、ちらつく事でした。

○

土工事の鐵路工夫の一隊と汽車見る
土手の土筆一隊

若い工夫達が、鍬を杖にし、スコップを輕くついて立竝んで、仕事を休んで、土手の上から、汽車を見下してゐました。實は土手でなくて、丘陵地帶であつたのかも知れません、汽車は、左右に小高い地續の間を、切道したレールの上を徐行してゐました。

ふと見る崖の上、芝の中、

『まあ、澤山の土筆ですねぇ——』

「やァ、これは、大した土筆」

「これ位、澤山あると、取りたくならないでせう」

幼兒のやうに、取りに下車したい程でしたが、あんまり、ぎつしり、生え續き、立並んでゐるので、取る氣にもならないのです。五六本か、せめて十本位なら、みな取つてしまひたいのが人心。しかし、かう多くては、こつてもくこりきれないのですから、生えたまゝに立たしておく他はありません。工夫等の中には、片足で、二十本も三十本もの土筆を蹈み倒しても氣にさへかけない樣子ですもの。

土筆も、「やア、汽車が來たね」と、立並んで見下してゐる形であつたのも面白いではありませんか。

「そんなに澤山あるのですか」

「幼兒をつれて、こりに行きたいですね」

さういはれても、それが、何線の何驛近くの事であつたか、私は、今、覺えてゐませんから、ノートを出して、幾册も、しらべて見なくてはなりません。（一三、一〇、一一）

第四十三回 關西聯合保育會

去る十月十七日、（神嘗祭）岡山市內山下尋常高等小學校に於て第四十三回關西聯合保育會が開催せられました。參會者千五百、誠に盛會でありました。當日議せられました要項を左に拔萃致して置きます。

1、建議案

一、幼稚園保姆ノ教養程度ヲ小學校本科正教員ト同等以上タラシムルコト

二、幼稚園長及保姆ヲ視學等ニ任用スルノ途ヲ開クコト

三、幼稚園長及保姆ノ若干數ヲ奏任待遇トナスノ途ヲ開クコト

四、幼稚園保姆ノ月俸額ヲ小學校本科正教員ニ準ゼシムルコト

五、幼稚園長及保姆ニ對シ年功加俸ヲ給スルコト

六、幼稚園教育ヲ義務制トセラレ度コト

2、協議題

一、幼兒ニ非常時局ヲ認識セシムル程度及其ノ方案如何（大阪市保育會提出）

二、私立幼稚園經營ニツキ最適ナル方策如何（神戸市保育會提出）

三、時局ニ鑑ミ保育上資源愛護ニツキ如何ナル點ニ留意スベキカ（吉備保育會提出）

3、談話題

一、幼兒ノ體力別、組編制ニ就テ（堺市保育會提出）

二、園兒ノ夏季休業中ニ於ケル生活指導ニ就テ承リタシ（名古屋市保育會提出）

三、幼兒ト映畫教育ニ就キテ承リタシ（京都市保育會提出）

一、研究發表

1、幼稚園兒の繪畫に於ける二三の實驗的研究（京都市保育會）

2、觀察に於ける幻燈の新生面（名古屋市保育會）

3、幼兒の音感教育に就いて（堺市保育會）

一、遊戲交換

「およぎ」「子買う」（吉備保育會）

「縄とび」「劍道」（神戸市保育會）

「お國の爲に」「幼稚園朝會體操」（大阪市保育會）